内鮮一體と朝鮮文學[[1]](#footnote-1)

春園生

内鮮一體の實現性

朝鮮は支那事變を契機として、多くの方面に大飛躍を示した。此處に云ふ飛躍とは、普通つかはれて居る様に、進歩と云ふ言葉の修辭的誇張としてゞはなく、論理的飛躍とか、進化的飛躍とか云ふ場合の意味に於いての飛躍である。進化又は變遷の過程に於いて、自然通らなければならない諸段階をば、一足躍びに躍び越えたと云ふ意味の飛躍である。教育令の改正も飛躍であり、志願兵制度も飛躍であり、内鮮一體と云ふ標語も飛躍であり、何よりも朝鮮民衆が、心から日本國民にならうと決心し、現にその實を示しつあるのは誠に飛躍中の大飛躍であると云はねばならぬ。

　南總督は朝鮮統治に飛躍の一大時期を劃すべく朝鮮に來られたに相違ないが、それにしても支那事變と云ふ、否亞細亞再建設と云ふ、聖業が始まらなかつたならば、南總督の呼掛が、斯くも適確に朝鮮民衆の心に共鳴して、斯くも力強い効果を収めることは出來なかつたであらう。今次の朝鮮の大飛躍は、聖戦を通じての帝國の神々しい姿の發露と、南總督の聰明にして誠意ある意圖と、そして朝鮮民衆の國家に對する心構へと、この三者が巴に相合致して成されたものと云ふべきであらう。此の意味に於いては、これは實は飛躍ではなくて、當然にして必然なる因果過程であると見るのが至當である。因熟せざれば決して果は生ぜぬ。只吾人の誠意ある努力が因を増強し、且つ、その因が果に轉ずる爲め緣となるに過ぎない。決して無から有は生じないものであると云ふのが、自然の理法であり、同時に人事卽歴史の理法である。

　だから、朝鮮に於ける、今日の内鮮一體運動をば、一部では、或は官製であると称し、或は附焼刃［で］あるとけなして、疑問の目を以つて見られる向きもある様であるが、それは因果の理法を無視した見方である。何んとなれば朝鮮民衆の進路は、皇民化以外にないと云ふ儼然たる事實と、他方國家に於いては、朝鮮民衆に對して一切平等の臣民の資格を差許すと云ふ意志表示と、この二つが相合致して内鮮一體の實が上がらぬ道理はないのである。只差當り内地人側に於いては朝鮮人の忠誠の程が、朝鮮人側に於いては内地人の誠意の程が、未だはつきりせず、未だにそれを實證する丈の多くの事例も乏しい關係上、何んだか聲だけぢやないかと云ふ様な感が、一部にあるのも一應肯けるが、併し數千年異なつた歴史に育つた所の、七千萬對二千萬と云ふ兩大民族が渾然たる一國民に化すると云ふこと自體からして旣に歴史的大事業であるから、その完全なる成果を一朝一夕に求めると云ふことは餘りにな考方であつて、お互にその眞心が通じ合ひ同じ信念を抱いてそれに向つて努力せんとする決心さへ附いて居れば先づ大収穫であると[、]お互に慶賀し合ふべきではなからうか。而も朝鮮民衆の、皇民化に對しての今日の心構へだけでも、今日の非常時局を切抜けるの[に]は十分であると斷言せらるゝに於いてをやである。

文學の國民性

　扨て朝鮮文學のことであるが、文學は政治觀念に左右さるべきでないと云ふのが通念の様である。文學が如何なるイデオロギーの奴隷となるのもその本然の道より外れた墮落である如く、政治の奴隷となることも墮落である、と云ふのである。これは誠に尤もな言分であつて、文學に關する限り眞理である。文學は、人性の永遠性を凝視し、如何なるイデオロギーに依つても歪められない所の眞實の詠歌者であり描寫者である處に文學の眞價があるのは云ふ迄もない。若し、然りとすれば日本精神と文學との間には、如何なる關係があるか。況して内鮮一體と文學とには、如何なるがりがあるか。何等合理づけらるべき因果關係はなからうではないか。

　これは一應首肯出來る理論である。否、これは眞理である。文學は政治觀念等に左右されてはならない。作者の人生觀乃至藝術感情以外の者に左右されることは、官吏が情實や賄賂によつて左右されることが惡である如く、確かに惡である。

　併しながら、「人性の永遠性」「作家の藝術的良心」とか云ふ觀念をば無批判的に受け入れてはならない。さうすることに於いて、吾人は重大な誤謬に陥る恐れがあるのである。然らばその重大な誤謬とは何んであるか。これこそは、文學の國民性を論ずるに當つての根本問題である。

　吾人は人類とか、人性とか云ふ言葉を無雜作に使ふ習慣を持つ様になつて了つた。恰も個人と云ふ言葉を無雜作に使つて來た様なものである。ところが、正しき認識に於いては、個人と云ふ全然獨立した個體がない様に、人類と云ふ、全然普遍化したものも、事實には存在して居ない。個人と云ふのも、又その極端として人類と稱するのも、一つは極めてナイヴな感覚的な見方であるし、他の一つは極めて抽象的な、よしんば空想までに行かぬとしても、理想的な概念であつて、何れも現實的存在ではない。吾等が現實的に認識し得るものは、實に民族又は國民あるのみである。國民主義に對して個人主義と云ふものがあるが、國民的性格や傅統等に捨象して、後に殘つた個人と云ふものは果して何んなものだらうか。それは恐らくは影よりも薄いものであり、殆んど生命力のないものであらう。であるから、或人が、自分は獨立した一個人であると思ふならば、それは錯覺か幻影かに過ぎない。之に反して、或人が、自分は一世界人であると稱するならば、これ亦、個人に於けるとは違つた意味で錯覺か幻影かである。何んとなれば、猶太族でさへ、何れの國かに國籍を有する様に、何れかの國民性に染まつて居るからである。人類進化の遠き將來の或段階に於いてなら知らぬこと、吾人の認識閾に於いては、國民性を超越した世界人はあり得ない。彼のお釋迦様でさへ印度人としてお生まれになつたし、印度人の傳統に基いて印度人に教を説かれたではないか。そして此の宇宙主義とも云ふべき釋聖は明らかに國王に對する忠義を説かれたのであるが、これは國民生活が人間生活の單位たることを御認めになつたことである。事實上吾人は、國家を通じて、卽國家に對する義務を通じて人類に盡すことが出來るのである。

　此の見地から吾人は、個人主義や世界主義の名で通る、あらゆる人生觀を誤れるものとして排除せねばならぬ。然るにいわゆる自由主義の名を以つて通つた政治思想、文學思想は個人主義的なものであり、所謂社會主義として通つた政治、經濟、社会、乃至文學藝術に對する思想は世界主義的なものであつて、共に間違つた見解に属するものである。もつと適切な言葉で云ひかへれば、個人や世界の意義を履き違へた人生觀、文化觀、藝術觀と云へよう。

　甚だ踈略な論述ではあるが、これにて文學の國民性と云ふ事實が握めたらうと思ふ。

朝鮮文學の將來

　然らば今日迄の朝鮮文學は如何なるものであつたらうか。こゝに朝鮮文學と云ふのは日韓併合後の新しい文學を指すのであるが、それだけでも、作者にして數百人に上り、作品にしては數萬を越えるのであらうから[[2]](#footnote-2)、これを簡單に分類し終ると云ふことは、甚だ輕はずみなことではあるが、併し便宜上、過去三十年間の朝鮮文學の傾向を、人道主義、社會主義、藝術至上主義の三つに大別することが出來るものと思ふ。この中の人道主義とは、國民的偏見から離れて、人間を人間として觀てこれを愛すると云ふ態度であつて、トルストイ的と云ふことが出來ようし、社會主義とは云ふまでもなく、人類を有産、無産の兩階級に峻別して、これをして相敵對せしめ、而して無産大衆をして、有産階級を憎悪し、その祖國をば、有産階級の利益のみ代表するものとして、これに反抗せしめやうとする所の例の無産文學のことであつて、これ迄の朝鮮には吾は日本國民なりと云ふ強き信念と、昂揚されたる感激を以て作られた文学は殆どないと云つても過言ではあるまい。

さて以上挙げた、過去三十年間の朝鮮文学の態度は、何れも清算されねばならぬ態度である。世界主義や個人主義が日本の國體觀念に[もと]るのは云ふまでもないが、民族主義は、その認識と同情の範囲をば二千萬から、九千萬に擴大し、その郷土愛を朝鮮半島から日本帝國全體に押し廣めねばならない。これは單に朝鮮人ばかりのことではなくて、内地人に於いても同様であると信ずる。卽ち、世界主義や個人主義（これは何れも正しくない意味に於いて、卽ち國民性を捨象した意味に於いてゞあるが）を清算せねばならぬことは内地人側に於いても同様であらうし、又民族に關する認識と同情の範團を、七千萬から九千萬に廣げる點に於いても同様でなくてはならぬ。

　客年朝鮮文人協會が出來たのも、實は、この趣旨からである。朝鮮半島の文學をして望ましからざる傾向を清算せしめ、眞理と正義を基調とする、新しい日本文學たらしめようと云ふのである。

かう云へばとて決して、シヨーヴイニズムを高唱するのではない。日本精神とは、そんな狭隘なものではないと思ふ。八紘一宇と云ひ、之を中外に施して悖らずとの御趣旨、何れも日本精神の眞理性、正義性、隨つて普遍妥當性を意味するのだと思ふ。唯々今日彼の歐米人の稱して眞理と正義とするところと日本精神とは、その主要なる點に於いて相背馳して居ると云ふまでのことである。日本精神が若し日本人のみに妥當なものであるとすれば、それは、日本人の理想とするに足らぬであらう。この精神によつてこそ先づ東亞が救はれ、延いては世界をまで救ふんだと云ふ信念を持たせる程のものであればこそ、日本精神と云ふのであらう。吾人が以つて、文學の基調としようとするのは實に、かゝる日本精神を指すのである。日本的なものは何んでも好いと云ふ譯ではない。忠孝一致の精神やき心もて神と吾とに、を捧げまつるところのいとも難有き精神と、それにふさはしいところの凡ての文化精神を指すのである。かゝる精神を基調とした文學を作らうと云ふのが、朝鮮文人協会が理想とするところの、日本精神に基いた國民文學の建設なのである。朝鮮に於ける文人の殆ど全體が、朝鮮文人協会に加入したのであるが、彼等は國家に對する新しい感激に推進されて日本精神に基づく自修と創作とに依つて、今後漸次新しい文學を生むことであらう。或は國文を使用するものもあらう。或は朝鮮文を使用するものもあらう。併し何れにしても日本精神に基いた、國民文學であることに變りはない筈である。

文學と内鮮一體[[3]](#footnote-3)

　國民文學だからと云つて、國策の宣傳機關にならうと思ふものはあるまい。それと同じ様に、文學が内鮮一體のイデオロギーを盛ることに依つて、内鮮一體に貢獻するものでもない。或作品が若し先づ文學たる上に、その中に内鮮一體の精神が織り込まれて居れば、それは甚だ結構なことであるが、文學が特に内鮮一體の提燈を持たんがために作らるゝことを要するのではない。唯だき日本精神の文學であれば結構であり、それが卽ち内鮮一體の促進に資するところの文學であらう。

　然らば文學と内鮮一體との関係は如何なものであらうか。文學が内鮮一體のために盡し得る役割は何んであらうか。確かに役割はある。あつても仲々に重要な役割である。

その第一は内鮮文化の交流に於ける一員としての文學の役割である。兩民族が渾然と一體となるには、お互に眞に理解し合はなくてはならない。何んとなれば、愛敬は理解から生ずるからである。然るに、かゝる種類の理解は調査報告や旅行等によつて達せられるものではない。それは個人と個人、家庭と家庭との、利害關係を離れての親しき接觸と、そして第二には文化の交流とである。

個人や家庭の非利害的接觸が、相互の接觸の最も重要にして効果的たることは云ふを俟たぬが、併し是は限られたことであつて、大量的に望むことは仲々に容易でない。こゝに文學の華々しい役割があるのである。卽ち朝鮮人は内地の文學を讀むことによつて内地と接觸し、内地人は朝鮮の文學を讀むことによつて朝鮮と接觸するのである。であるから、眞の日本の姿を描いた文學や眞の朝鮮の姿を描いた文學は、内鮮一體のための絶好資料であるべきである。ところが問題は眞の日本の姿、又は眞の朝鮮の姿を描くと云ふことであるが、こゝにこそ、「日本精神に基く」と云ふ、文人の自己修養を要するのであつて、眞に祖國を愛する心を持たないものに、祖國の眞の姿が見えよう筈はない。であるから日本精神に生きる文人の文學のみが、克く眞の日本の姿を把握し、これを世に傅へることが出來るのであり、朝鮮文人にしても、日本帝國の構成要素としての朝鮮及朝鮮人を克く把握したものでなければ、眞の朝鮮の姿は描けるものでないと思ふ。日本人の書いた文學にして、日本を間違へて傅へたものや、朝鮮人のそれにして、朝鮮を間違へて傅へたものが少くないことを見れば思半に過ぐるであらう。

　次に重要なことは、内鮮文學人同の接觸である。文人は正直者である。彼は體面を繕ふとか、齒に衣を被せるとか[、]さう云つた世間的の作爲に疎い種族である。彼は感じたまゝ見たまゝを率直にぶちまけるのが立前であり、加之感じたこと見たことを、悩中に秘めて置くことの出來ない癖者である。彼は時構はず、處構はず、自分の所感と所信とを一管の筆を通じて放送する習性の持主である。だから内地側の一文人に朝鮮に對する眞の認識を與へると云ふこと、又朝鮮側の一文人に内地人に對するき認識を與へると云ふことが、如何に重要な意味を有するかは、想像に難からぬであろう。ところが文人と云ふ者は政治家とか實業家とか云ふ種族の云ふことを信用しない。彼等が最も信用するのは民衆自身か、さもなければ文人同であつて、路傍の一乞食の言に、一政黨總裁の言に對してよりも、より多く耳を傾け、それから、より多き眞理を發見したがる者である。その次は文人の、いと見すぼらしき詩句を尊重し、氣まぐれの片言を尊重することであるが、それは、裃で繕はぬ、民衆の代表者としての裸かの言を信ずるからであつて、必らずしも、文人の偏癖とは限らぬのである。かゝる理由で[内]鮮[[4]](#footnote-4)文人同士の接觸は、内鮮關係の解決に取つて、甚だ重要な意味を有するものと云はざるを得ない。

結論

以上述べたことを要約すれば今後の朝鮮文學は、「吾は日本臣民なり！」の、新しい感激を基調[と]して、國民文學性を強く帯びたものであらう。

　而して内鮮の文學及び文人乃至文化人の繁く且つ親しき接觸によつて促進されて、文學に一新時代を劃するであらう。朝鮮民衆は、久しく感激に渇へてゐた。感激のないところに文學はない。よしんば、感激があつたにしてもそれは僅かに個人的なものか、回顧的なものであつて、雄大さが缺けてゐた。國民的感激より雄大なものはない。眞に内鮮一體が實現されて、朝鮮民衆が舉つて國民的感激に燃える時、その時に、朝鮮には大文學が生まれるであらう。（完）

1. 朝鮮総督府が発行する『朝鮮』の1940年3月号に掲載され、『同胞に寄す』に再掲載された。文章はほぼ変わらないが、読点に修正が施されている。本テクストもそれを参考に一部修正した。 [↑](#footnote-ref-1)
2. 「數萬」は『同胞に寄す』では「數千」に修正されている。 [↑](#footnote-ref-2)
3. 「文學と内鮮一體結論」と誤植され『同胞に寄す』で修正されている。 [↑](#footnote-ref-3)
4. 原文は「朝鮮」になっているが文脈上「内鮮」である。 [↑](#footnote-ref-4)